

自らに勝って初優勝

毎日コツコツ一級建築士

《第23回ハンディキャップ競技九州大会》

～1日目男子の部

ネット62（ハンディ19、グロス81）

椎葉 光一（大博多、77歳）



ゴルフは自分との闘いと、よく言われるが、77歳の椎葉の初優勝がまさにそうだった。アウトの前半を2バーディー、2ボギーのパープレー36。ハンディ19を考えると、圧倒的に優位なスコアだった。しかし、インに入ると、10番からダボ、ダボ、ボギー、トリプル、ボギーと5ホールで9オーバー。「30分休憩があつてリズムが狂った。集中力も欠けたし、なんかフワーツとしていた」。ここで立ち止まる。「1球1球

自分のやれることをやろう」と気持ちを切り替えると、15番からの4ホールをパーでしのいで、終わってみれば2位に4打差で優勝である。

「気持ちの大切さをまざまざと感じた。優勝はまぐれです。みんなに『いける、いける』と乗せられた。ハンディ19はみんなから羨ましがられて」

福岡市生まれで職業は一級建築士。ルーツな苗字で分かるように宮崎県椎葉村にある。ゴルフは32歳で始め、4～5年ほどやめていたが、再びクラブを手にする。練習は「ボケないために体を動かそう」とほぼ毎日のように練習場に通って40～50球打つ。ドライバーの平均飛距離は210ヤード。「真剣にやるのはパターだけど、素人はドライバーが当たらないと後が続かないし、面白くない」とドライバーショットの練習にも力を注ぐ。長年続けて来たゴルフの魅力を「難しいのが楽しい。そこを何とかしたくなるから。それに友達が増える」と話す。

全国大会出場に向け「楽しんできますよ」と77歳はにこやかに笑った。

初出場初優勝

シングルプレーヤーを目指す音楽療養士

《第23回ハンディキャップ競技九州大会》

～1日目女子の部

ネット66（ハンディ12、グロス78）

内田 幸子（トライアルOITA、65歳）



初出場初優勝の内田にはペアリングというツキがあったのかもしれない。グロス78で12のハンディを生かしてネット66。「出来過ぎです。ショットは曲がらないし、パターが入った。それに同じ組にハンディ2のうまい方がいて、その人のスイングが参考になった。リズムがいつも一定で、ずっと見ていました。すごいな、と」。その方とは林加奈子（佐賀クラシック、50歳）。彼女はグロス80、ネット78で20位タイだったが、内田に幸運を運んできたのである。

アウトからスタートし、ボギーが3つ先行するが、9番で7mを沈めてバーディー。前半を38で折り返し、後半のインはバーディーはなかったものの、4ボギーの40。大きく乱れなかったのが優勝に繋がった。

大分市生まれで、ゴルフは28歳から始めた。ピアノ講師をしながら40歳まで夢中になるが、職場が変わると時を同じくしてゴルフから離れる。「クラブを握らないし、ゴルフを全く見なかった」。この間、内田は音楽療養士の資格を取って病院勤めをした。音楽療養士とは、音楽の力を活用して心身に障害を持つ人々の機能回復や生活の質の向上を支援する専門家。現在は非常勤で仕事にあたる。

クラブは58歳から再び握るようになる。現在は「目指せ！シングル」を合言葉に週3回、練習場に通う。1回100球を打つが、ほとんどアプローチに費やす。全国大会は2021年の九州女子シニアで12位タイに入って出場以来。「落ち着いてできたらいいな。勉強させていただきたい」と謙虚な姿勢で臨む。

初競技で初優勝

最多ハンディを生かす

《第23回ハンディキャップ九州大会》

～2日目男子の部

ネット62（ハンディ25、グロス87）

島田 祥一郎（福岡サンレイク、50歳）



強力な援軍となった。1日目と2日目、男女を合わせても最多ハンディの25。島田の87のスコアは2日目の男子のグロスで見ると、参加86人で後ろには24人しかない。いかにハンディをうまく活用したかが分かる。「たまたまというか、はまりました。ラッキーです。大穴です。同伴者に迷惑をかけないように、とばかり思っていました。何しろ初めての競技ですから。目標スコアは97以下でした」とただただ驚くしか

ない。

40年来の付き合いという今大会の1日目の部に出場した、同じ福岡サンレイクGCのメンバー馬締（まじめ）次郎から誘われて参加。月例会の経験はあるが、対外競技は初体験である。「緊張しました」は素直な感想だ。ベストスコアは86。この大会のために10月12、14日と練習ラウンドを行ったが、109と100の三ケタを記録した。不安の中でのプレーだったが、現在の実力の最大を引き出した。

何が良かったのか。「いつもはショットがあっちこっちに行くのですが、OBが少なかった。それに、どこに打ったらいけないとか、このコースをよく知ってますから」。1ラウンドの平均OB数は6・4個。それが、この日は2個に抑えた。4番ロングで第1打を右、15番ミドルでは第2打が林に消えた。いずれのホールもトリプルボギー。全体の内容は1バーディー、6ボギー、2ダブルボギー、2トリプルボギーである。ティーショットの際にはドライバーと5Wを持参。OBが出たら、大叩きをしないように5Wで確実にフェアウエーを捉えるように心掛けている。

福岡県小郡市生まれで同市在住。仕事は倉庫業に携わる。高校時代は祐誠高（福岡県久留米市）野球部に所属し、3番でファーストを守り、秋の神宮大会にも出場した。高校時代は豪打でならしたものの、当時75～76kgの体重は病気などもあって今では60kg。「強振していない」ドライバーの平均飛距離は250～260ヤードという。

「左は冷遇されています。中古クラブも少ないので買う時は新品です。今回も新しいのを5本買って臨みました」という185cmのレフティーには、もちろん初めての全国大会。「恥をかかないようにしたいし、楽しみたい。今後のモチベーションになりますね」とファイトを燃やしている。

「まさか」の初優勝

前半の35で波に乗る

《第23回ハンディキャップ九州大会》

～2日目女子の部

ネット65（ハンディ12、グロス77）

伊森 愛（ミッションバレー、47歳）



2日目の部は男子優勝の島田も自らの成績に驚いたが、女子の部を制した伊森も同様の表情を見せた。「もう、ビックリ。最近はショットも悪いし、パターもうまく打てなかった。練ランもひどかったし、今日はないな、と諦めていた。想像にないスコアが出ました」と嬉しいビックリである。

インスタート。最初の10番で手応えを掴む。パーパットの6mを沈める。「今日は違うな」と、いい感触を得る。続く11番で3パットボギーとするが、ショットが安定しているだけに心の動揺もない。15番で8m、16番でも5mのバーディーパットを決めて、前半は2バーディー、1ボギーの35。パーオンできなかったのは最初の10番だけだった。後半のアウトは3つのダブルボギーがあって42のスコアだったものの、残り6ホールは全てパー。90以上を叩いていた練習ラウンドと比べると、雲泥の差である。「悪かったのが気負いもないし、開き直ったのが良かったのかも。途中でパターの打ち方も思い出した。悪い時は手で打っていたけど、体で打つイメージを思い出したら転がりが良くなった」。勝つ時はこういうものかもしれない。物事がいい方にいい方に進んだ。

北九州市戸畑区生まれ。現在は福岡市に住み、建設業を営むご主人の手伝いをする。ゴルフは30歳前に始め、結婚、出産などで一時は離れたが、8年ほど前にご主人から「どうせするなら難しいコースで修業したら」と勧められてミッションバレーGCの会

員となる。このハンディキャップの大会以外では九州女子ミッドアマにも出場。今年は93のスコアで75位タイだった。「全国大会に行くのは初めて。自分が行くとは思っていなかったの、どこでするのかも知らない。それぐらい『まさか』でした」と話していた。

《福岡サンレイクGC》



